

適正施設ガイドライン

【シロオリックス *Oryx dammah*】

2021年3月

公益社団法人日本動物園水族館協会

1 飼育環境

シロオリックスはこれまでに北海道を除く国内各地で飼育されている。

本種は日本の気候に適応できる能力を持ち、繁殖も可能である。野生下では群れを形成して行動するため、飼育下でも複数頭での飼育管理が推奨される。各飼育園館の環境に応じて、本種の持つ特性を考慮した飼育環境を整えるように努めなければならない。

1-1 温度・湿度

シロオリックスは日本の夏場の高温、冬場の低温にも耐えることが可能である。

しかし、多湿な環境、積雪が続くような寒冷な環境下で長期間管理することは体調を崩すことにつながる。特に体力のない幼獣・老齢個体では注意が必要である。

1) 温度

シロオリックスは高温低温共に耐性があり夏場の猛暑、冬場の氷点下であっても屋外への放飼が可能であるが、終日を0℃以下で管理することには注意が必要である。最低でも半日または屋内収容後に10℃以上の環境に置くことが望ましい。体力のない幼獣、老齢個体では特に注意が必要で、生後3か月未満では終日15℃以上で管理し、生後6か月が経過するまでは最低温度が0℃以下の環境へ置くべきではない。

2) 湿度

シロオリックスは多湿を好まない。高温多湿な環境下では採食量と運動量が著しく低下するため、注意が必要である。行動範囲が制限され蒸れやすい屋内では、温度25℃以上、湿度70%以上であれば夜間でも扇風機で風を送る等で通気性を保ち、水はけの良い環境で管理を行うべきである。多湿環境下で長期間管理し続けることは趾間腐爛の罹患にもつながるため、温度を問わず床や蹄を乾燥させておくことが望ましい。

1-2 照明

シロオリックスは日光浴を好み、長期間日光を浴びさせずに管理をすると毛艶が落ちてくる。屋外に放飼を行っている場合では特に特別な設備は必要ない。放飼場は日当たりの良い場所に用意することが望ましい。日陰は必ず用意し、個体自身が自由に選択できるようにしておく。

1-3 音・振動

レイヨウ類の多くは警戒心が強く突発的に走り出すことがあり、シロオリックスも同様である。その個体が初めて体験するような音や振動、物体には細心の注意を払うべきである。また、他種の発する警戒音にも反応を示す。

1-4 面積・容積

シロオリックスは1頭の雄と複数の雌で群れを形成し、行動する為、複数頭で管理を行う前提で飼育スペースを確保する必要がある。

1) 屋外放飼場

シロオリックスは警戒時、興奮時に突発的に走り出すことが多くみられる。そのため、放飼場には走ることが可能な面積が必要になる。また、速度に乗ると急なカーブや反転を行うことができず、放飼場の外周に沿って走る傾向があることから放飼場の形は正方形もしくは円形にしておくことが望ましい。成獣3頭の極小規模な群れでは、最低15m×15mの広さが必要と考える。狭い面積での管理は構造物への衝突事故、過密飼育による土壤の汚染へとつながる。性成熟した雄同士では激しい闘争と追廻が見られるため、隔離できる予備の放飼場があることが望ましい。広さは1頭当たり25㎡あればよい。また、他種との混合展示や担当者がシロオリックスと同じ空間内で作業を行わなければならない場合には、お互いが距離をとり合う必要があるため、さらに広い面積が必要と

なってくる。

2) 屋内寝室

毎日放飼場に解放する場合、寝室にさほど広さは必要なくシロオリックスが旋回可能であればよい。1頭では1室最低2.5m×4m、2～3頭では5m×5mが必要であり、親子や雌同士であれば同居は可能である。

1-5 構造・設備

シロオリックスは雄1頭と多数の雌で1つの群れを形成するため、放飼場では他頭数で管理可能な設備が必要になる。また、1-3でも記載したとおり警戒心が強く、直ちに警戒対象から走って遠ざかろうとする。しかし、飼育下では行動範囲が限られてくるため、自身が落ち着くことができるまで距離をとれずパニックを起こし、「暴走」する可能性もある。施設内を走り回り、構造物に激突することを幾度も繰り返す。このような性質を考慮した上で施設内にはシロオリックスが反転できない狭い場所、袋小路に陥る場所は作ってはならず、構造物には激突防止対策と、それに耐えることが可能な材質を用いなければならない。

1) 放飼場の構造

放飼場は鉄製のフェンス、鉄柵、コンクリート製の壁、モートで囲うことで脱走防止や行動範囲の制限が可能である。シロオリックスは跳躍が得意ではないため、高さ2mの垂直な壁は乗り越えることができない。よって壁の高さとモートの深さは2m以上にすることが望ましい。モートでは、シロオリックスが速度にのった状態で跳躍した場合2mの幅であれば飛び越える可能性があることと、滑落の危険性も考慮した上で勾配と幅を検討する必要がある。

シロオリックスは頻繁に構造物に角を擦り、押し付けるため、フェンスや鉄柵を設置する場合はそれに耐えられる強度と差し込んだ角がすぐ抜くことが可能な網目の形状を選択すべきである。また、角の長さは1m程になるため、網目に差し込んだ際に来園者に危険が及ばないように観覧場所から距離をとって設置する必要がある。

電気柵を使用する際は、平常時では行動抑制に多少の効果を期待できるものの、暴走時には効果がなく、四肢や角へ絡まることで事故の原因となる可能性を考慮しておく必要がある。

個体に対するストレスを軽減するうえで、放飼場の観覧は全方位からではなく最低1面は来園者からの視線を遮っておく方が良い。

2) 放飼場の設備

① 土壌の材質

放飼場の土壌は水はけの良い性質の物を選ぶと良い。野生下では半砂漠～草原地帯に生息しているため、湿った土壌、石や岩盤が目立つ土壌のみで管理することは蹄疾患につながる。また、放飼場の1区画は緑化を行うことで、景観の向上、夏場の地温上昇防止の効果が期待でき、土砂の流出を防ぐことができる。

② 餌場、水場

シロオリックスは野生下では長期間飲水を行わなくても生息が可能とされているが、飼育下での飲水頻度は多く、新鮮な水を好む傾向がある。飼育下では乾物飼料を中心とすることが多いため、常に新鮮な水を用意する。餌場は放飼場内の動物が密集しやすく、糞尿による汚染が進みやすい。コンクリート舗装することで土壌侵食を防ぎ、衛生管理でも有効である。

③ シェルター

シロオリックスは直射日光に耐性があり、日光浴を好むため、放飼場内は日当たりが

良いことが望ましい。しかし、高温多湿な環境では日陰で休むことが多くなることや、低温時の雨風を遮るためにも必ずシェルターを設置しておく。シェルターの屋根は角の長さを考慮した高さに設置する。餌場同様に土壤汚染対策が必要である。

④ 植栽、岩や倒木など

樹木は日陰、雨避けに、岩組や倒木などの設置は行動の幅を増やし、折り合いが悪い個体同士の距離をとるための遮蔽物となる。ただし、暴走時には自身が通り抜けることのできない幅にも関わらず突進していくこともあるので、衝突を回避するためにも設置個所には十分に注意する必要がある。

3) 収容施設の構造

① 寝室

寝室の壁の高さは2m以上で、管理に必要な作業を行う面以外は視界を遮っておくことが望ましい。ただし、新規導入個体などその環境に慣れていないような個体は、突発的なパニックを引き起こす可能性が高いため、状況に応じて常時全視界を遮断し、閉鎖的な空間を用意する工夫も必要である。

壁はコンクリート、鉄柵、木製、及びそれぞれを組み合わせたもので良い。角の擦り付け、個体の衝突に耐え得る強度が必要である。また、施設内を外周沿いに走る特性を考慮し、壁には突起物が無いようにしておく方が良い。

親子、雌同士であれば同居が可能であるが、成熟した雄は、闘争の危険性から必ず1頭で管理を行う。同居可能な大部屋と、雄、療養個体、妊娠個体を隔離できる小部屋を用意し、裏飼い個体用の放飼場を用意できることが望ましい。

閉鎖的な空間内でシロオリックスと担当者が滞在することは危険である。寝室の清掃、放飼場への移動等は、担当者とシロオリックスが直接接触しなくとも可能であるよう、施設の構造を検討すべきである。

② 寝室の設備

・ 床・敷材

床の材質は衛生面、水はけを考慮し、コンクリート製が望ましい。有蹄類は足を滑らせ転倒しやすいため、表面はあまり滑らかにせず、さらに十分な厚みの敷材を敷き詰めた方が良い。敷材は目の細かいものである方が滑りにくい。個体が採食しても問題のない材質を選択する。冬場では敷材を厚く敷き詰めることで、地面へ体温を奪われることを防ぐことができる。

・ 飼料曹、水入れ

常設ではなく状況によりいつでも寝室から取り出せるものを選ぶ。四肢や角を接触させ、事故につながることもある。乾草や固形飼料は、糞尿に汚染されなければ床に直接撒いても問題ない。成獣では1度で50程飲水する。あまり深さがあるものは四肢を入れ込んだ際に危険であるため、水入れは1頭で20ℓ前後の容積があるもので良い。

・ 暖房器具

幼獣、療養個体には必須である。室内全体を温めてしまうと、屋外との寒暖差が大きくなり、放飼個体への負担が大きいため、保温が必要な1個体、1部屋にスポット的に設置すると良い。個体によっては警戒心から暖房器具から距離をとる個体がいるため、遠距離まで温風が届くような器具が望ましい。